

辺を多くは上方の温帯ステップや高山草原に、東方の低地とは湿潤なセーハ地帯などにくぎられて全く谷毎に孤立しており、アンデス高地のプレインカの古文明の通路ないしは展開地(たとえば東大で発掘したコトシ(Kotosh)の遺蹟は *Espostoa* の林に囲まれた河畔の丘陵上にある!)として海岸地方の本帶および半砂漠との関連が重要であるが、それよりも各河谷の隔離による独立が細かな種形成の具体的な場として恰好の研究資料であるようにみえた。サボテンの細かい分類はしばしば個体変異の中に足をつっこんでいるが、こうした環境から再検討がされるときとすっきりするであろう。

これらの谷の中ではマラヨシ河の中流 Bagua を中心として幅 100 km にわたって展開するものは、最も熱帶的の典型であって、ここでは柱状サボテンと *Capparis* とが密林をなしその間に葉を持つサボテン *Peireskia* が点在して独特の景観を呈していた。やや高所のものとしては、その上流にいったん湿潤な地帯をへだててさらに南東から北西へ 350 km も続く Balsas を中心とした地帯が著しいが、上述のコトシ遺蹟の所在地すなわちワヤガ河のワヌコ盆地のそれもまた狭いが著しいものである(長さ約 40 km)。これらの山中の本帶では上限もまた高くなり 3000 m に及ぶ。こういう高所でも風向きなどを考慮すれば屋敷内に露地でパパイアの栽培が可能であるのを実見したが、一般に太平洋に開いた河谷の狭い平野で緑色に見える所はほとんどこの地帯といってよい。この緑はその大部分がアンデスの雪解け水を利用した用水によるものであって、大体においてサトウキビの栽培が採算がとれる程度に植えられるのである。(つづく)

□日本菌学会会報草野会長米寿記念号 (Transaction of the mycological society of Japan, Jubilee volume of President Dr. S. Kusano. 1962) pp. 154 草野俊助博士の米寿記念号。36 篇の論文の外に先生の思い出などをのせたもので Karling や Sparrow など海外からの論文ものっている。印刷もよいし内容も充実していて我が国の菌学の草分けとしての先生をお祝いするにふさわしいものであったが、これの出版とほとんど前後して先生が急逝されたのは痛恨事であった。 (前川文夫)

□ポールト(西田誠訳): 植物の世界 pp. 142 ¥ 380 岩波書店(1962) これは米国の Prentice-Hall 社から出た Foundations of Modern Biology Series 11 冊中の 9 冊を岩波が現代生物学入門としてまとめて訳出した内の 1 冊である。これは新しいタイプの教科書である。分類学のように見掛けはひどく古いもので、新らしく理解させるよう書くことは容易ではない。著者の H. C. Bold はテキサス大学で土壌藻類を専攻するが、すでに Morphology of plants(1957) の好書もある人である。全体を 10 章にわけ、序論、藻類、菌類、蘚類と苔類といふ風にすすめて被子植物まで追い上げ、最後に総括をする。一見簡単すぎるようだが分類といふことの意味がよく理解できるよう書いている。双書の第 6 編 [ハンソン(八杉竜一訳) 動物の分類と進化] とを併読すると一層よい。 (前川文夫)